

『酔いどれクライマー 永田東一郎物語』80年代 ある東大生の輝き（藤原彰生著）

永田東一郎。1959年生まれ。第三日暮里小、日暮里中、都立上野高校、東大理1。東大スキー山岳部（TUSAC）に8年所属し、谷川連峰ドウドウセン初踏破、南硫黄島探検、冬季滝谷登攀、冬季利尻登攀、英国隊などニカ国5隊を退けたカラコルムのK7に隊長として初登頂を果たすなど活動する。大学卒業後、登山から退き建築界に入る。三カ所の建築事務所を経て89年独立。仕事が激減しアル中になる。肺炎で入院後肝硬変となり2005年2月食道静脈瘤破裂で死亡。46歳。離婚した妻との間に長男、長女がある。

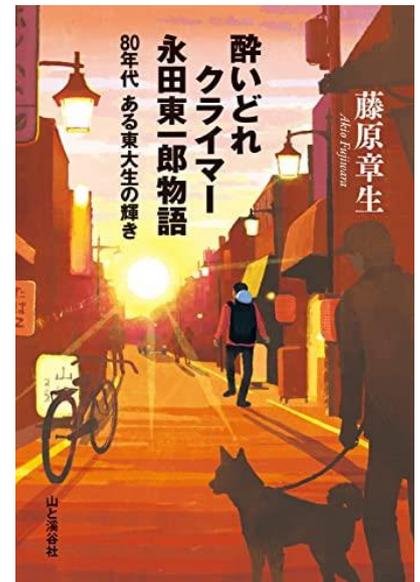
著者の藤原彰生は永田の3歳年下。上野高校山岳部（UHAC）のとき知り合う。永田はある日、屋上にある上野高校山岳部に立ち寄り著者と知り合う。その後、トレーニングに参加し「田端の壁」に初登攀したりする。著者は北海道大学に進み北大山岳部で活動する。卒業後、毎日新聞の記者になり外国の特配員となり永田との縁が薄くなる。

2017年秋に一時帰国し、仲間と呑んだとき12年前に永田東一郎が亡くなったことを知る。この本は登山本ではあるが永田東一郎のことだけでなく著者の生き方と80年代の世の中の動きと日暮里・上野・田端の土地が濃く描かれていることが面白い。時空間に強く貼り付いている描写が良い。

全12章のうちメインとなる東大スキー山岳部の話は第4章から第7章までだ。たったの4章、その中に彼の登山の全てが描かれている。ここがメインだ。

第8章から第12章までは山から離れバブルの時代の空気や建築事務所での仕事や結婚生活などが描かれている。多くの友人に取材し、当時の彼の生き様を丁寧に追っている。「存在が過剰」「輝いていた自分を、俺は生きてると、これが俺だぞと嫌というほど見せた人」しかし仕事来ない。

91年結婚当初から呑み方が半端でなかったと離婚した妻が語る。毎晩ビールのロング缶を5本空ける。妻が寝た後、永田さんの呑みはそこから始まる。一人で近所、鶯谷や日暮里のスナックに朝まで通った。高い店には決して行かない。ただし、夜半前から朝まで飲み続ける。いいちこのボトルを一晩で2本空ける。それを毎晩続ければ一ヶ月で30万である。妻は証券会社でエンジニア。稼ぎが良く、永田さんを養ってきた。永田さんはヒモ生活。借金してまで酒を呑むようになる。サラ金からの督促電話が家にかかってくる。妻と離婚する。末年は惨めである。我が身を振り返ってしまった。永田東一郎という男の生き様と80年代を描いた本である。



山と溪谷社 2023年3月10日発行 1980円（フカ）